セブン・エンジェルズ　*SEANGEL's BRIGADE*

１９７９年アメリカ映画
監督＝グレイドン・クラーク
脚本＝グレイドン・クラーク＆アルビン・ファスト
出演＝ロビン・グリア／スーザン・キーガー／
シルビア・アンダーソン／ジャクリーン・コール／
ジャック・パランス／ネヴィル・ブランド

まずは『セブン・エンジェルズ』。もうとっくに廃盤になっているでしょうし、レンタルビデオ屋でも置いてある店は極少でしょう。無理もありません。とにかく、再生ボタンのスイッチを押したとたんに、クズ映画とすぐ分かる正真正銘のＢ級作品です。

画面は妙に暗くて、色のノリは悪いし、ざらついてるし。ストーリーはそれに輪をかけてへろへろで、とてもじゃないが、レンタルの回転率の悪さを我慢して、店に置いておくべき名品とは、口が裂けても言えません。

当時は多かったんですよね～、こういうビデオ。一九八〇年代のビデオブームのさなか、小さなビデオ輸入会社が雨後の竹の子のごとくにょきにょき生えてきて、屑でもなんでもいいから、店に並べれば、それなりに収益があがった――あがらなくても、未来への投資ということで、現場は上役を説得でき、プロデューサーは投資家から金を巻き上げられた――そういう幸福な時代があったということなんですよね。

今はそうもいきません。ビデオ業界の凋落が囁かれて久しいですし、ＤＶＤなんて新製品もできて、こちらのほうが投資のしがいがあるということで、ビデオ会社も名作を次々と廃盤にして、

とにかく見たければＤＶＤ専用機を買え！　と促してる状態ですもん。あの頃のように、マニアには垂涎のゴミ映画が次々とリリースされるという幸福な時代は終わっちゃったんでしょうね。

で、この『セブン・エンジェルス』です。とにかくグラマラスな美女が、男性を叩きのめすシーンに興奮を覚えていた私は、あれは昭和天皇がお亡くなりになる前年だと思います、就職して初めてもらったボーナスでビデオデッキを購入し、さっそくレンタルビデオ屋漁りを始めたんですね。最初はいわゆる名作漁りから始めました。それがしだいに、こんなのとてもじゃないがビデオでしか見る機会があるはずないというマニアックなクズ映画へと趣味が移っていくのは、ほんとに時間の問題でした。

ストーリーから紹介しましょう。ラスベガスで歌っている女性シンガーの弟が、麻薬組織によって殺されます。彼女は、ふたたびアメリカの少年たちに、二度と弟を襲った悲劇を味わわせまいと決意、折しも弟を教えていた女教師を誘って、麻薬組織を壊滅させるべく立ち上がるんです。

そこから後は、お決まりの「七人の侍」パターンですね。頼むにたる美女を求めて（女性でなければならないという必然性はまったくないのですが）、黒人のスタントウーマン、はみだしものの女性刑事、ファッションモデル、ベトナムから来たケイコ（！）なる合気道の達人などが集まります。当然、みな巨乳美女。金髪、ブルネット、イタリア系、黒人、アジア系と、国際色豊かなチーム、やり口はそうとうあらっぽいです。

まずは、極右団体を襲撃して武器を強奪。さらに、犯罪組織の情報を得るために末端の売人（ダービー・ヒントン／ゴミ映画「カラテガール」で金髪空手女に、股間に棒を叩きつけられた挙げ句、両眼を潰されてあえなく昇天していました）を拉致監禁、逆さ釣りにしての拷問です。それも、合気道の達人のケイコが「はいやっ！」と日本刀を売人の股間に振り下ろし、寸止めにしてびびらせるという荒っぽいとしかいいようのないやり方。それをへらへら笑って見ている女たち。こうなると正義の味方なのかサディストなのか……。

海外から麻薬が陸揚げされるという情報を得た美女たちは、現場を抑えるべく急行。その現場というのが、海水浴用のビーチ。どう考えても、迎え撃つ美女たちを水着にするための設定ですね。ま、文句は言いますまい。おかげで、ビキニの金髪美女が、豊かな胸をぶるぶる揺らせながら犯罪者（黒人）に襲いかかり、拳の裏で金玉を一撃！　股間を抑えて飛び上がる男の肛門に、背後からもう一人の水着美女がパラソルの先端をズブリ！　なんて大馬鹿なアクションシーンが拝めたわけですから。

チームの一員である女性刑事は、彼女らの活動を警察に公認させようとします。でなければ、いくら悪人どもをやっつけても、犯罪行為ですからね。ビーチで押収した麻薬を、女刑事上司のもとに持っていき、「どう？　私たちも役に立つでしょう」と主張するのですが、七人の美女た

ちは、犯罪者どもを取り押さえたビーチから、着替えもせずに水着で警察に直行。初老の上司は口をあんぐりあけて、美女たちの収穫よりも、水着姿に圧倒されて、ついにお墨付きを与えてしまうわけです。

さあ女たちは、もうやりたいほうだい。胸の大きく開いたぴっちぴちのスーツに身を固め、犯罪組織の麻薬精製工場を襲撃します。ここで、ケイコさんがこの映画二度目の金蹴りをお見舞いする。工場の男たちは銃ひとつ持っていなくて幸いでしたね。女たちは無事、ダイナマイトで工場を粉砕、目的達成……。

まあ、ディティールの面白さのカケラもないシナリオ、女性たちのへぼい演技、巨乳と生脚だけがちらちらする、まさにクズ映画の鑑ですが、なぜか男性側のキャスティングがすごい。

犯罪組織のボスに扮するのはジャック・パランス。名作『シェーン』の早打ち名人の悪役を演じ、オールド映画ファンには知られた存在です。『バットマン』やシルベスター・スタローン主演の『デッドフォール』などで、重厚かつ憎々しい犯罪組織の大ボスを演じています。そんなA級映画で堂々と準主役を演じる重厚な名脇役ですが、この映画では最後に、美女チームに加わりたかったけど相手にされていなかったティーンエイジのパッキン小娘に射殺され、プールに落っこちてお陀仏と、その芸歴に比して、滑稽にして哀れな最期を遂げます。

女刑事の上司を演じているのはネヴィル・ブランド。ブルドッグのような顔をした渋い脇役で、一九五〇年代の映画版『アンタッチャブル』でアル・カポネを演じたこともあります。女教師を誘拐しにきて股間を蹴られてしまう情けない犯罪組織のナンバー2役はピーター・ローフォード。かつてケネディ大統領の遊び仲間だったこともある二枚目です。

正直いって、これだけの低予算で、これだけの顔ぶれが並んだ映画は見たことがありません。この映画のタイトル・クレジットでは「主演＝ジャック・パランス」です。つづいてネヴィル・ブランドやピーター・ローフォードら男性陣が主演格で並び、女性陣は「助演（co-starring）」扱い。純粋な活躍度ではなく、俳優としてのランクでば、そうなるんですね。

まあ時代なんでしょうね。映画が制作されたのは一九七九年。アメリカ映画も、七〇年代のニューシネマブームが行き詰まり、八〇年代のルーカス、スピルバーグ、スタローン、シュワルツェネッガーの活躍で息を吹き返す狭間の時代です。一方で、ホームビデオが普及し、B級映画がセルビデオやレンタルビデオというかたちで、全盛期を迎えるのではないかという予兆が芽生えてきたころでした。

まだ、海のものとも山のものともつかない分野の産業は、かえって投資家に過剰な期待を抱かせることはあるものです。この『セブンエンジェルス』だって、「これからは、こういうのが儲かる」と製作者たちの舌先三寸に踊らされ、投資家たちから金をかき集めることに成功、ジャック・パランスだって、よく分からないままギャラがいいのならってことでＯＫしてしまい、できあがった作品を見て、しまったと臍をかんでも後の祭。そういうペテンが堂々と罷り通った時代だったんですねえ。

ビデオ映画黎明期の混沌とした時代の産物とでも申しましょうか。ビデオ産業が凋落し（落ちつき?）、本格的作品とB級の格差が山のように開いてしまった今となっては、Yesturday once more!と叫びたくなるような作品なのであります。